

聖書：創世記5：1～32

説教題：神とともに歩む

日時：2020年1月26日（夕拝）

創世記4章ではアダムとエバから2つの流れが生じたことが記されました。一つはカインの流れ、もう一つはアベルの代わりとしてのセツの流れです。カインは弟アベルを殺しても悔い改めずに主の前から出て行きました。その子孫においては牧畜業、芸術分野、鉄鋼業などの様々な領域での文化・文明の発展・繁栄が見られましたが、その流れを特徴づけていたのは、レメクの歌に見られたような高慢で自己中心の文化、他人のいのちを軽視して人殺しも辞さない殺伐とした世界でした。それに対して4章最後の2節には、もう一つの流れとしてのセツの家系のことが記されました。彼はエノシュが生まれた頃から主の御名を呼ぶことを始めました。いわば神礼拝の文化の新たな始まりでした。今日の5章は、そのセツの流れについて引き続き記しているところです。神を敬い、神を信じるセツ系の子孫は、その後どうであったのか、それは神から離れ、神なき文化を作り上げて行ったカインの子孫とどう違っているかという視点で読んで行くべき箇所です。

まず5章1節からの部分に目をやると、そこには最初の人間の創造と神の祝福のことが改めて述べられています。神は人間をご自身に似る者として、ご自身を映し出す存在として造られました。これは人間にだけ言われている表現です。また男と女とに創造されました。神はこの創造した日に彼らを祝福されました。造られた最初の人間とこの世界の上には神の豊かな祝福がありました。そのアダムからセツが生まれたことが3節に記されています。ここで私たちの目に留まることは、セツが「彼の似姿として」、すなわちアダムの似姿として生まれたと言われていることです。「神の似姿として」とか「神のかたちに」とは言われていません。ここには次の二つのニュアンスが込められていると思われます。一つはアダムが造られた時の神のかたちがセツにもこのようにして伝えられているということです。アダムは神の似姿として造られ、セツはアダムの似姿として造られました。そこには連続性があります。アダムが受けたものがセツにも伝えられています。しかしもう一つのニュアンスもここにはあると思われます。セツを生んだ時、アダムはすでに墮落していました。ですからそのアダムの似姿として生まれたということは、アダムの罪も引き継いだということです。確かにアダムが造られた時の神のかたちをセツは引き継いでいますが、同時にアダムが持つ歪み、あるいははずみも受け継い

でいる。その結果として、この後の記録に繰り返し出て来るのは「死」という現実です。

しかしそれを見て行く前に、私たちは当時の人々の寿命の長さに驚嘆してしまいます。ここに記されているほとんどの人が900年以上も生きています。これは今日の私たちからは信じられないような長さです。そこで色々な人が色々な解釈を試みて来ました。ある人は当時の一年間の日数は今日と違ったのではないか、もっと少なかったのではないかと言います。またある人はこれは個人の寿命ではなく、その個人を代表とする一族あるいは氏族が生き延びた期間を指しているのではないかと言います。またある人はこれは象徴的な数字なのではないかと言います。しかし未だにこれを文字通り取らない方が適切であるとする説得力ある解釈は出されていないようです。ですからこれはこのままに理解するのが最も妥当であるというのが聖書学者たちに一般に受け入れられている見解のようです。聖書から分かることはノアの洪水を境にして人間の寿命はどんどん短くなっていき、やがて100歳前後に落ち着くということ。このことは洪水前の世界と洪水後の世界とでは環境が大きく変わったことを暗示しているかもしれません。本来、永遠に生きるべき存在として造られた人間は、造られた当初の世界では今よりはるかに長く生きることのできる環境に囲まれていた。しかし洪水後はそうでない世界へと変わってしまった。以前のように長く生きることは困難な環境となった。そういう世界に今の私たちはあるということなのかもしれません。

さてどんなに当時の人々の寿命が長いものだったとしても、この5章に繰り返し出て来て目立つのは、最後にはみな「死んだ」という記述です。アダムは5節にある通り、930年生きて死にました。善悪の知識の木から取って食べたら、あなたは必ず死ぬと言われ、その後、「あなたは土のちりだから、土のちりに帰るのだ」と主に言われた宣告通りです。これは人間の罪の結果、人間に生じるようになったことです。アダムの後もその記録が続きます。一人一人に神の宣告が成就しています。墮落した世界の悲しい現実の記録です。

しかしこの単調なフレーズの繰り返しが変わるところが出て来ます。それは21節からのエノクの記録です。それまでと同じパターンで記されるなら、22節は次のようになるはずでしょう。「エノクはメトシェラを生んでから三百年生き、息子たち、娘たちを生んだ。」ところがエノクの場合、その真ん中に「神とともに歩み」というフレーズが挿入されています。そして全生涯の長さが記録された後、これまでのパターンに倣

えば、「こうして彼は死んだ」と記されるべきところが、彼の場合、「エノクは神とともに歩んだ」と再び記された後、「神が彼を取られたので、彼はいなくなった」と記されています。これはどういうことでしょうか。「神が彼を取られた」という表現は死を指す婉曲的表現として理解することも可能かと思われませんが、それなら他と同じく「こうして彼は死んだ」と記せば済むことですので、これは他の人々に起こったこととは別のことが起こったと読むより他ありません。従ってこれは他の人々とは対照的に、死なないうで天へ引き上げられたと取るのが自然でしょう。ヘブル人への手紙 11 章 5 節はエノクについてこう述べています。「信仰によって、エノクは死を見ることがないように移されました。神が彼を移されたので、いなくなりました。彼が神に喜ばれていたことは、移される前から証しされていたのです。」 聖書にはもう一人、死なずに天に上って行った人としてエリヤのことが記されていますが、あのエリヤと並んで死を経ずして天へと導かれて行った最初の人が、このエノクであったのです。

彼について、彼は「神とともに歩んだ」と言われています。聖書の中には他に「神の前を歩む」とか「神の後を歩む」すなわち「神に従って歩む」という表現がしばしば出て来ます。それらと比べてこっちの方が上ということではありませんが、この「神とともに歩む」という表現ほど、神との親密な交わりの生活を強調する言い方も他にないのではないのでしょうか。まるで二人三脚で、呼吸まで一緒に合わせて、ともに歩いたかのような言い方です。しかも一時的に、気紛れにではなく、300 年間ずっとそうでした。一生涯、彼は「神とともに歩む」という言葉で特徴づけられる歩みをしたのです。その彼が他の人より短い地上の生涯を経て、死なないうで天へと引き上げられて行ったのです。

これは創世記 5 章において特別のメッセージを語っているものではないでしょうか。この 5 章をここまで読む限り、常に死が人を支配していました。どんなに長い地上の人生を歩んでも、最後はみな死にました。罪の結果としての死には誰も逆らえません。しかしエノクの記事を読む時、私たちは死が必ずしも最後ではないということを教えられます。ここに死に屈服させられなかった人がいます。死に捕らわれなかった人がいます。死を乗り越えた人がいます。それはどのようにしてそうなったことなのでしょう。それは神とともに歩む生活を通してでした。まさにいのちはそこにこそあるということでしょう。当時の人々もエノクが取られて、彼は一体どこへ行ったのかと戸惑ったことでしょう。そして最終的に彼らは天を仰がせられたのです。そして思ったのです。地上がすべてではないのだ。天のいのちがあるのだ。人は神によって死を越えたいのちに生きる

者となることができるのだ！と。

もう一つ、この5章で私たちの目に留まるのは、28節以降のレメクの記事です。これは前の4章に出て来たカインの子孫のレメクとは別人物ですので混同しないようにしなければなりません。彼は182年生きて一人の男の子を生み、その名をノアと名付けました。そして彼がこう言ったことが29節に記されています。「この子は、主がのろわれたこの地での、私たちの働きと手の労苦から、私たちに慰めてくれるだろう。」ここにはどんな意味があるのでしょうか。この言葉からレメクは苦勞していたことが分かります。セツの子孫といえども厳しい毎日を送っていたのです。墮落後の世界として地は呪われています。苦勞して働きながら、やっとのことでその実を手に入れて生活しています。そんな彼は慰めを必要としていました。そこで「慰め」という言葉と関係するノアという言葉、生まれた息子に付けたのです。ここに彼のどんな思いを読み取ることができるでしょう。明らかにこのレメクの言葉は創世記3章17～18節を反映しています。神は墮落後のアダムにこう言われました。「あなたが妻の声に聞き従い、食べてはならないとわたしが命じておいた木から食べたので、大地は、あなたのゆえにのろわれる。あなたは一生の間、苦しんでそこから食を得ることになる。大地は、あなたに対して茨とあざみを生えさせ、あなたは野の草を食べる。」この神の宣告をレメクは思い起こしています。しかし注目すべきは、だからと言って彼は絶望し切ってはいないこと。確かに嘆息しています。疲労困憊を味わっています。にもかかわらず、この彼の言葉には明らかに希望があります。ある種の楽観的響きを感じられます。なぜ彼はそのような思いを持つことができたのでしょうか。それは今読んだ創世記3章17～18節とセツで語られた3章15節の主の言葉も彼が覚えていたからではないでしょうか。主はやがて救い主を下さる。蛇に打ち勝つ女の子孫をくださる。その救い主の約束を心に留めて、主がくださる慰めを待ち望んでいた。この息子の誕生の内に、神はそのことを実現してくださるかもしれない。たとえノア自身がその人でなくても、神の救いの約束はこの子の誕生を通してまた一つ前進していく。その神を見上げ、神に期待し、その信仰に生きている人の姿がここにあるのではないのでしょうか。こうして次の章のノアの話へとつながって行きます。確かにレメクの信仰告白の通り、救いの約束は継続し、ノアにおいて一層の進展を見せるのです。こうしてみると、いかにセツの流れはカインの流れと対照的でしょうか。これはセツの子孫が前の章の最後に記されていた通り、主の名を呼ぶ礼拝生活、祈りの生活へと進んだことと決して無関係ではないでしょう。

以上、墮落によって本来の祝福の状態からは大きく落ちてしまった人間たち。たとえ今日から見て長い期間、地上で生きても、結局最後は死に服させられていた人間たち。しかしそんな私たちに大きな希望があることを創世記5章は示してくれています。死は終わりではないこと、これに勝利するいのちの道があることをエノクの生涯は証ししています。またどんな労苦に囲まれた毎日の生活の中でも救い主による慰めを待ち望むことができることを、レメクの言葉は私たちに示しています。この記録に導かれて、私たちがセツの流れが指し示す信仰の祝福に生きる者とされたいと思います。色々な困難や苦しみに取り囲まれ、思わずため息をついてしまいそうな毎日があっても、救い主を通して神は私たちを慰めてくださることを信じて顔を上に上げる信仰の生活へ、また私たちの生活はこの世で終わるものではなく、天で神と永遠に生きることへと召されていることを仰いで、エノクのように神とともに歩み、上へと召していただくことに至る真の幸いな歩み、いのちの歩みへ導かれて行きたいと思います。